HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本におけるフットパスの展開とまちづくり
Author(s)	神谷, 由紀子
Relation	歩く滞在交流型観光の新展開 The New Development through Extended Stay and Interactions with Locals in Walking Tourism
Citation	CATS 叢書, 12, 105-124
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73758
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS12_11.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『日本におけるフットパスの展開とまちづくり』
CATS 叢書第 12 号，北海道大学観光学高等研究センター（2019）

日本におけるフットパスの展開とまちづくり

神谷 由紀子
日本フットパス協会／NPO 法人 みどりのゆび事務局長

25 年前に東京都の町田市でフットパスの活動を始めまして、そして日本フットパス協会の設立に参画して今に至ります、神谷と申します。最初のロゴは私たちフットパス協会がイギリスの WaW と 2015 年に提携をしまして、WaW ジャパンということになっておりますのでその象徴として出さしていただきました。レジュメなど遅れて申し訳なかったのですが、というのは、昨日の報告や今日の報告を拝見していまして、私は町田の例をずっとやっていて、もうそろそろほかのところの例を話したいと思っていたのですが、これはフットパスとは、というところから始めないといけないと思いまして、全部急遽、昨日の夜、町田の例も入れたりして、最低限なのですが、こんな形で報告したいと思いますが、よろしくお願いいたします。

変わる観光とフットパス

まずは、フットパスとは何か。いろいろありますが私たちが考えた日本フットパス協会の定義としましては、イギリスを発祥とする森林や田園地帯、そればかりではなく、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くことなんですね。ありのままとは何かというと、結局、人間の営みやそこで行われてきた「よすが」みたいなものですね。みなさんが原風景とか子どものころ見たとか、良いなとふと思うこういう景色とか道というのは、ありのままなんですね。だから、すごくありのままの景観というのは大きな意味があるんです。イギリスが発祥というのを、今、塩路先生からご紹介がありましたけれども、マップを持って家族で三々五々歩いたり、ガイドさんにつれてもらって歩いたり、こんなサインがあったりします。日本でもフットパスがあります。こんな里山を歩いたり、一方、こういう街中、これは町田の公園から市街地、神社の、これが老舗ですね。老舗があって町田はディープで面白いということになっているんですけれど、このような、別に里山だけじゃなくて市街地でも何でもとにかくいいんです。すべてどんなところにもフットパスはあるという考え方です。

フットパスは何かというと、ありのままを楽しんで歩くということなんです。「YOU は何しに日本へ」これは結構有名なテレビ番組ですけど、今、観光のあり方自体が変わってきているんですね。今までのように名所、旧跡を点的に歩くのではなくて、普段のまま、私はあそこが好きだから、あそこで見た日本海に沈む夕陽がいいとか、要するにひとつのまちに自分が行って良かったなというまちを見たい、それからひとつのまちを立体的に知りたい。そ

この歴史とか文化とか何とかテーマを決めて歩くのではなく、目の隅から入ってくる情報全体で、いいな、札幌ってこういう感じだよねってそういうのがフットパス、つまり今の観光なんですね。

フットパスの特徴

じゃあ、歩くということではフットパスはほかの歩きと何が違うのか比較してみると、健康ウォークや観光とは少し違っているのではないか。観光と比べると深い感動があるというか、観光となると名所、名所を点的にポン、ポン、ポンと行って、その間はバスで行って一度行けば満足という感じになっちゃうんですけど、フットパスの場合はいい道、気持ちのいい自分たちが感動するようなところをつなぐ。名所や旧跡はその気持ちにいいみちにサブルートとしてつなぐので名所・旧跡もいい道の延長にあったなという感じでいい感覚を持って、また行こうかなという気持ちになる。

それから目的やテーマを定めない歩きです。歴史ツアーとか自然観察とかテーマを定めた歩きだと、だんだん人数が減っていったりして要するに一般的ではない。多くの方は歴史も自然もちょこちょこっと色んなものが入った、特に地元の人のお話なんかを聞いて「そういうのいいよね」みたいな、そういう、テーマではない感性で捉える歩きが好きですね。

それからどんな人でも歩けるのがフットパスです。トレイルだとちょっと高いところは厳しいかなというのはあるんですが、フットパスの場合は道がループ状になっているので、お母さんがベビーカーを持ってとか高齢者とか自分の体調にあわせて歩くことができます。フットパスはつなぐとロングトレイルにもなるんです。「じゃあ今日はトレイルであそこまで行ってみようか」とか体調のいい時には長く歩くことができる。

それからあとは、発見ができる。散歩も毎日が発見なんだよといわれたらそれはそれまでなんですけど、みんなが感動する道を選んで歩くから発見が多い。そのあげく、すごく多くの人を引きつけるので、ファンとかリピーターがすごく来る。そうして、やはり楽しい。一緒になって歩いてみんなとお話ししながら歩いて、地域の人も声をかけてくれて。「どっから来なさったねぇ」「東京」「わぁ遠いところから」と言ってもらうとお互いにうれしくなります。フットパスは魔力があって、だんだん感染していくような感じですね。

地域を活性化するフットパスの魔力

それで、フットパスは観光のように名所・旧跡などがあるわけではない。でもいい感じでしょ。また行ってみたいなと。こういうのがフットパスなんですね。私たちはそう思っています。

そしてフットパスはどこにでもある、みなさんの住んでいる町に必ずある。それを見つけたら皆さんが自分のまちをもっと愛するようになるし、私たち観光客もそうですけど、地元の方たちに自分たちのまちももっと愛してもらいたい。

フットパスの魔力って何かというと、良い道をつなぐだけで、まずリピーターが来る。1

週間後に花が、今回これがさいていたから次に 2 週間後に来るとまた違っている。その感覚、感性がもてる。不思議なことに地方創成というと特別なものを最初に取った人が勝ちという競争みたいになっていましたけれども、そうではなくて自分の地域のいいところをつないで歩いて行くとどういうわけか自然にオンリーワンの魅力が出てくる。要するにそうですよね、人が今まで歩いてきた営みを歩く訳ですから、そうするとそれが誇らしくなる。そうすると隣り合わせたまちとこんなに違うという差も発見できる。それから楽しい。理屈なしに楽しい。また来たいということになる。そんな中から自発的なまちづくりの気運というのが出て来たんですね。フットパスの効果として一番あげられるのがまちづくりの効果です。といっても 25 年前、始めた頃は本当にこのことが分かってもらえなくて、今、やっと時代がついてきたなという感じなんですけども。例えばフットパスをやると、農業に関心を持ったりする人が増えるんですということも今は普通ですけど、昔は全然理解してもらえなくて。

現在、65 団体会員がいるんですが、今、実感として次第に増えてきているのが若い地域興し協力隊の方がすごくフットパスを作ってまちおこしをしたいという方が多くて、東京とか美里とか、九州とか北海道とかに来てフットパスを学んでいかれます。なぜかというと、フットパスは簡単なんです。いいコースを見つけてマップを作って、定期的にイベントを開催してやっていくだけでだんだん引き込まれていく。それから排他的ではない。フットパスは道ですから、イギリスと違って誰でも歩いていた道がフットパスなんです。だから、みんな誰でも歩けるし、トレイルさんがつかってくれてもいいし、トレイル・ランナーが使ってくれてもいい誰に使ってもらってもいいし。今、ジオパークとかトレイルとかオルレとかと一緒になってやろうという大きな動きになっていて、排他的ではない。フットパスもだれが使ってくれてもいいし。構わない。それからまず失敗がない。お金もそんなにかからない。失敗がないのでやってみて、小さくとも 1 つ成功例ができたらどんどん広がりますから、簡単だということで割合と若い人にウケがいい。日本の地方創成、最初に申し上げたように、最初はいいものを誰が一番先に取るかという競争みたいな雰囲気でしたが、今、変わってきている。それは私は本当に日本にはありがたかったと思います。日本の将来にとってよかったと思っている。フットパスはまちづくりを推進する効果を持っています。

フットパスの 5 つの効果

というのは、今から町田の例をお話ししますが、まちづくりの全部の要素がフットパスを作る課程で整ってくる。それがまちづくりに発展するのです。資源の発見、ファンづくり、共同体の再生、プラットホームの形成、それから経済効果ということなんです。

町田市は東京の中心から 30km 位のところにありベッドタウンで有名です。フットパスを始める以前は観光とは全く関係のないところでした。私たちのまちづくりは緑地保全から始まりました。首都圏の緑であり、イルカが寝ている格好の多摩丘陵も緑が少なくなり、かろうじて残っているのは、しっぽにあたる三浦半島と、目のあたり、大きめに残っている

ところが、私のフィールドの小野路あたりなんです。だいたい町田というのは多摩丘陵に90%のっかっているところで、そのためアップダウンがあって、箱庭みたいな景色に恵まれています。ところが、その小野路でもバブルの前にやはり 1990 年の終わりには、60 年代には緑があんなにたくさんあったのに、少なくなりました。でもフットパスを始めたことによって都市計画は今まで区画整理でもう換地変えまで行われていたのに、それをやめて 180 度転換して農と緑のふるさとにしようということになったんです。都市計画を変えることまで起きた。その前は、バブルの前ですから森はどんどんみんな宅地になっていった。

フットパスの効果―資源の発見とリピーター、ファン作り

これが私のフィールドの小野路です。本当に何もない所です。唯一新選組が通っていた宿場があるだけです。多摩丘陵の限界集落みたいな本当にこんなところです。でもすごくいいところで、ここがいいから、私たち緑地の保全をどうしたらいいかと考えていたんですが、そうしたら母が「ヨーロッパはみんな緑の道を作って歩いてるよ」。こんなにいいところだから紹介して歩いてマップ配って歩いてもらったら」って。それで、そうしてみようということで、いいコースをつないで。最初は啓発の意味もあったので、100 人くらい呼んで、「フットパスまつり」ということで始めました。そうしたら、今まで車で通り過ぎていたところを歩いてみたらすごく面白いということになりました。これは新撰組が通っていた切通なんですが今にも侍が出てくるような雰囲気だということで人気です。

次に、私たちが一番環境とか都市計画を考える場合に一番大事だと思うのは地主さんがどう考えるかということです。当時は緑なんて金にならないよ、歩いたって何したってそんなもんっていう感じだった。そこをどうしようかと思ったのですが、やってみなければわからない。とにかく 100 人を募集し 1 人 1,500 円だけもらって、15 万円ですよね。そのうち、10 万円分を地元に落として食事を作ってもらった。それもその地域で作られている昔から食べられているものをそのまま作ってください。ハイカラなものはやめてくださいと。その場で作られてきたものって、一番おいしくて安全だから守られてきたんだからそれにしてください、と。これは地粉のうどんなんです。これは煮しめとか赤飯とかよくあるものですけど、薪で作ったりわき水をくんで作ったり、まだ里山の生活が残っているのでそういうもので作ったら絶対においしいですよね。そうすると来た人が「おいしい、おいしい」って。それだけじゃなくて、地元の人も来る人みんなが「いいですね、おいしい」って言ってくれる。自分たちは隣に多摩ニュータウンがあるから「取り残されたかな」と思っていたのに、もしかして自分たちだけすごくいいところに住んでいるかなってだんだん誇りに思ってくれるようになった。それと一緒に台所にあった梅干しとか金ゴマが取れるので、金ゴマを出してもらったりまんじゅうを作ったり。「まんじゅうなんて売れるのかね」って最初は言ってたんですけれど、そしたら飛ぶように売れて、お母さんたちのところに何千円とか何万円とかってお小遣いが入るようになった。農家というのはやはり、現金収入がすごくうれしい。申し上げたいのは、このインセンティブはすごく大事です。またやりたいねって。一

年に 1 回だけなんですが弾みがついてやる気になった。まちづくりというのは国から何かをもらうことではなく、皆の目がキラキラして自分たちのまちを作っていこうということなんだということを学ばせてもらいました。

フットパスの効果―新しい共同体の形成

百人の食事を作るために数日前から切り込みしたり、お米を 10 回も研いだり、準備をするのですが、村の人と私たち新住民が全部で 30 人くらいで朝の 4 時から一緒に作業するんですけど、こういうことを何度か経験しているともう親戚みたいになってくるんです。それでお互いに「なんか新住民のひとたち嫌だなと思ってたんだけど案外いいかも」ってお互いにいいなと思っていたんだなというのが分かったりしてすごく打ち解けたというか入れてもらえた。そのうち、村の長老の話を聞こうとあるお宅を借り切ってみんな村の人が集まった。私たちも入って恵泉女学院大学の人たちも入った。そうしたら、だいたい村は隣同士が仲が悪かったりするのですが、そういう人たちがみんな来て料理を持って来て仲良くなって、今までの崩れかけていた古い共同体が私たちを入れて新しい共同体がここで再生された。それからすごく風通しがよくなった。そういうことが観察されました。

フットパスの効果―プラットフォームの形成

それから一緒にフットパスを作るために「好きな道調査」って名付けているんですが一緒に歩いたり、その結果ワークショップで話し合ったりしているうちに、何が起きているかというと、新しいまちづくりに対するプラットホームというか、次にどんな問題が起きてもその人たち集まった人たちを通せば新しいまちづくりができるという人材ができてきた。それが見られました。フットパスでもワークショップということをやるのですが、その目的はその場で何か結果を出すことではなく、必要な人材を集めることにあります。ワークショップとはプラットフォーム作りのための役割なのです。

フットパスの効果―経済効果

そして経済効果もある程度出て来ました。これは 2009 年度で少し古い調査なのですが、それまで観光とかなかったのですが、観光客数は 356 万人とかこれは小野路だけじゃないんですけど、利益は 90 億円だとか計上しています。一番すごいのが観光客のリピート率で、80％なんです。それだけの人が来るようになったということなんです。それからさっき、塩路先生がおっしゃっていたランブラーズ協会の発表ですが、イギリスにおけるナショナルトレイルでのウォーキングによる経済効果が 8 千億円で 2 万 4,000 人の正規雇用という効果を創出した。それからもっと小野路の例でいうと、小野路の宿場があったんですけど、その角に角屋っていう旅籠があったんですね。それが相続がおきて売りに出たのを市が買い取って里山交流館というビジターセンター兼交流センターみたいな施設作ったのですが、まちの人たちに経営させている。これによって、30〜40 人の雇用ができるようになり、13

年にオープンしてから 3 年で、16 年には 10 万人を数えた。要するに、「1 日 20 人もくればいいよね〜」って言っていたのが 100 人も 150 人も来るんだよねみたいになって、これだけの経済効果があったということですね。

若い人も来るようになってしかも農業とか第一次産業に興味を持つようになってくれています。これは理科の参考書を作っている若い先生たちなんですが、くずはきとか手伝いをしてみたいと言って来られました。また村の長老に伝統農法を、狭い谷戸なものですから耕耘機が入らないので、伝統農法を教えてもらって恵泉の学生さんたちと私たちが一緒にやっているんですけど、こういう風に今は若い人が農業に興味をもってくれるようになりました。そして、農業後継者の問題も、市民で農業をやりたいという人が増えてきているので、市が市民を応募して遊休地を地主さんから借り受けて 2 年間、育成して貸し与えるという農業制度を日本で初めて作るに至りました。

それから経済効果になるのかどうか、2012 年のスーモの住んでみてよかった町ランキングで町田が突然 4 位に浮上したんです。小野路での地元の人の誇りが町田全体の誇りになったんですね。なぜ良かったのかというと、中心市街地で若い人むけの大型量販店が多くある一方、里山などの緑がたくさん残っていて、若いファミリーのお母さんに好評だったんですね。

フットパスの貢献―まちづくりのための景観再発見、ファン作り、官民一体体制の基盤作り

それでは、なぜフットパスがまちづくりに向いていたかというと、まず、資源の発見ということでやっぱり景観がどんなに大事かということが再認識されたことだと私は思っています。開発をせざるを得ない時にも札幌なら札幌らしい景観を残した開発をするとか、なにかそれが目の隅から入ってくるとこで「あ〜札幌だな」と思う景観を残していくことが大事。そういうことだと思うんですね。それからあと、ファンづくりの思想が徹底しているところです。リピートして来たいと思ってもらえるように、フットパスはコース設定にしてもループ状になっていて、歩く人の状態によっていろいろなコースが選べるようになっています。「次はあちらのループをまわってみようかな」とか「今日はいくつかのコースを繋いでトレイルで歩こう」など自由に設定できるようにしているために定期的に来てくださるようになるのです。それからフットパスは、まず市民団体が始めてそれを自治体がサポートするような体制が取りやすい活動です。まちづくりは市民の作った体制を自治体が経済的にも支えるという、官民両方がないと根付かないものです。フットパス協会も自治体がベースとなっています。

フットパスは国家の成熟過程の現象

それと日本のフットパスというのはイギリスの真似ではないんです。もちろん影響は受けていますけれど。フットパスはイギリスを発祥とすると言われていますが、イギリスの真

似ではない。日本の中で草の根的に独自に発展した。イギリスではさっき塩路先生で詳しく説明がありましたけれども、産業革命があった後、いろんな動きがあったんです。それのひとつがレッチワースの田園都市構想だし、ナショナルトラストだし、それから生協という発想なんですね。要するに労働者が本当に過酷な生活をしていたときに、外を歩きたいとか良いものを食べたいとか、良いところに住みたいとかという欲求が一連の流れでフットパスもそれだったんです。今でも公園が貴族の持ち物だということがままあります。日本の場合は、バブルの後に高度成長期を経験した人間が、「こういう社会に住みたかったんじゃないよね〜」「もうちょっと落ち着いた足に地の着いた社会に住みたい」っていう現れがフットパスなんです。だからバブルの後でフットパスというものが出て来た。町田ばかりじゃなく日本のあちこちからなんですね。ある意味、これは国が成熟した象徴だと思うんです。

日本フットパス協会の設立

ちょうど私たちと時期を同じくして北海道の黒松内やテムズ川フットパスのような最上川フットパスを作った長井市、それから勝沼ってブドウとかワインとかですごい観光地にも関わらず価格が据え置きで目減りするから何か新しいことをやらなきゃいけないと将来を考えてフットパスを始めたところがありました。私が町田で経験したようなことは、ほかのところでも同じで、もう公式ができるんじゃないかなと皆で考えた。町田など何もない所でフットパスができたってことはどこでもできるんじゃないかな、ほかのまちのまちづくりにもお役に立つのではないかということで、フットパス協会を設立しようということになり、最初の集まった人たちが理事や企画委員となり、2009 年の 2 月に設立しました。

協会の特徴というのはまず、一つのまちの市民団体と自治体の両方の参加を基本とするということです。両方が必要です。市民団体が先に活動を起こし、成功すると、行政が認めて支援するようになります。

それから市町村の大小は関係なくみんな対等です。それから会長は自治体の理事者が交代で務めることになっていて今のところは町田の市長が会長をやっているんですけども、誰がなってもいいわけですね。運営は企画委員会でやる。一年間の総会開催地を南北交代にやっていて、今年は福岡県中間市で来年は宮城県柴田町とかとなっていて、何年か先まで埋まっています。今、65 会員です。そのほか、北海道の小川さんのフットパス・ネットワーク北海道で 50 会員、それからあと九州のフットパスネットワーク九州、これも 46 会員、それぞれ独自の会員をもっています。

イギリスの歩くまちづくり団体 WaW（Walkers are Welcome）

イギリスのまちづくり、Walkers are Welcome Town、さっきお話があったんですけれど、今の時点で 112 の自治体です。イギリス全土から参加しています。2015 年には、日本フットパス協会はこの WaW と提携して今、WaW .Japan になっています。

私は去年、イギリスのヘブデン・ブリッジという WaW の設立地で行われた 10 周年大会

に行ってきました。マンチェスター近郊は産業革命が起きたところで、その中でもヘブデンブリッジは中心地でした。WaW もこうした進取の気性に富むところで始まったのは偶然ではないでしょう。

WaW の大会は会員の自治体を持ち回りで毎年行われるのですが、大会の前後 1 週間ほどその土地のフットパスを歩きます。ヘブデン・ブリッジには、産業革命時に馬が繊維を運びながら行き来した石畳や、設立当時の生協の跡や、労働者をより多く住まわせるために傾斜地に 1 階 2 階別々な玄関を持つ住宅跡など、面白い遺産がありました。

10 周年大会では同時に年次総会が行われましたが、イギリスの総会は非常にインフォーマルです。これがヘブデン・ブリッジで WaW を始めたジャーナリストのアンドリュー・ビビーさんです。これがランブラーズ協会のケイト・アシュブルクさん。すごく有名な人なんですけれど、再来年、日本に来ます。

私たち日本からも、北海道の小田さんと私で話をさせてもらいました。私は日本のフットパスの活動について話をしたら「自分たちより案外日本のほうが進んでいるので、僕たち何を教えていいか分からない」とまで言ってくださいました。壇上の真ん中に立っているのが会長のサム・フィリップさんなのですが、今年、日本フットパス協会の柴田総会に来てくださることになっています。自分たちも大洪水に見舞われ多くの犠牲者が出たまちの代表で福島の被災地と姉妹都市提携を行いたいという申し越しもあり相馬新地町をお勧めして交流が始まろうとしています。

交流が重要

最初、イギリスはもっと自然派というか、歩き自体を楽しむ感じだったんですよ。それがだんだん経済的な活動になってきているというのは、いろいろな人が日本に来ているからだと思うんですね。

WaW の中にウィンチコムというまちがあります。そんなに特別なまちじゃない。そんなに特別なこともないまちなのに、すごい活性化しているんです。なぜかというと、私が思うに、シーラさんというこの女性、友達なんですけど彼女はウィンチコムの代表なのですが、日本に 2 回来ているんですね。そしたらやはり交流ってすごいと思うのはお互いに影響しあっているんです。日本で経済効果やフットパスの運営に関心があったので、それで、そういう影響もあって、イギリスも経済効果に関する関心が高くなってきているように思うのです。

ウィンチコムでどんな活動をやっているかというと、「どのくらい貢献してる？」と聞くと、「年間 1 千万くらいになってる。8 年やったから 8 千万は貢献してるわ」って。すごくウエブサイトが変わってきて、広報に力をいれ、また、どん欲になって、自分たちのまちを案内するだけじゃなく、人のまちまで行って迎えに行っちゃう。そのまちも案内して自分たちのまちでメインに利益がでるように活動しているんですね。すごく観光化を進めて積極的な活動をしている。交流というのは本当にすごいことだと思いました。1 週間のロングバ

ケーションも提案していて、月曜日には何をして、火曜日には、水曜日には、積極的に効果をあげることをやっているわけですね。

フットパス・ネットワークを世界に

最後にフットパスの未来ということで、私たちはイギリスとだけじゃなくて、WaW インターナショナルを作ろうね、とあちらのサム会長さんたちと話をして、今、そういう動きなっているんです

あと、若い人たち、都市住民が暮らせる環境を作っている。要するに、フットパスは一家に一台みたいに、どのまちにも作れるものですから、どんなまちにも若い人とか都市からの移住者が入ってくる可能性があるんですね。つまり、人口が戻ってくるということです。人が集まればその地域の中心地にある中堅都市がまた再開発することもあるでしょう。例えばなんとか地域ヒルズみたいのをもってきてもいい。そうすると土日はみんなそこに行って遊んで、普通は穏やかな生活ができる。

今、すごく地域おこし協力隊の人たちが頑張って若い力でやってくれるので、日本はイギリスに比べたらすごく若い力が生きているなと思いました。それと、フットパスの可能性としては地方都市消滅の問題というのがあるのですが、解決方法があると NHK の番組でやっていました。それは 1%の人口増加、もしくは 1%の経済成長、まあこれは大変な努力がいることですが、そのまちに毎年あれば消滅を免れるということなのです。実際に、消滅の可能性がなくなった村があるということが新聞にありました。フットパスならこれが達成できるかもしれない。すごくバーンとは利益が出たりはしないのでしょうが、地道なことはできる。そういう可能性をフットパスはもっているかもしれないのです。

＜＜質疑応答＞＞

徳永哲

地域に対してとても愛情のこもったお話ありがとうございました。うかがっていて特に町田の活動が印象に残りました。日常と非日常の時間があって、その間を行き来する中での感動とか時間の過ごし方としてフットパスが登場してきたという理解をしました。まちづくりとして、町田のまちをどうしようかという中で、フットパスが登場したのか、フットパスに着目し始めてそれをやっていて資源発見とかということで、まちづくりに発展すると考えたのかをお聞かせいただければと思います。

その次は、イギリスのフットパスとは違って日本は地域ごとにオリジナルなんだというのがありました。それでも共通の部分もちょっと感じましたのが、昨日のお話でも自然保護とか巡礼の道は自分と向き合うとかそういう話がありました。このフットパスになると自分たちの環境をちゃんと見る、ちゃんと知る。そういうことを通じて将来のことを考えるということにもなっていくと思いますので、そのあたりが多分に日本の場合はまちづくりに

展開の可能性が広いというか、強くそれが結びついているのが日本のオリジナルということになるのかなと思いました。そういうとらえ方を神谷さんもお持ちかどうか、というところを聞きたいと思います。

地域の活性化に向けてフットパスを生かそうというのは共通のテーマだと思いますが、基本的には活性化というのは地元の人にとってどういうことで、それがフットパスではどんな風に絡んできているのかが、だんだん見えてきつつあるように感じました。地元のことを外から来た人にも評価してもらいたいとか、新しく住み始めた人も「この町にはこんな魅力があっていいですね」と元から住んでいた人とコミュニケーションを取れたりという良さがあって。場合によってはコミュニティビジネスとか特産品のブランド化とかそういう風にも結びついていくということが出てくるとこれもまた、将来に向けて新しい可能性をみんなで協力し合うことでできてくる、確認し合えるということが地域の方々にとってのメリットというか、ご紹介いただいた経済効果もあると思うのですが、気持ちの部分が強いのかなとお話を聞きながら考えたところです。

私はランドスケープの計画関係の仕事をしております。お話の中でも景観が大事というのがありました。風景は時代とともに変化していきますけれども、何かこのまちの、この土地のオリジナルのところを残していこう、埋もれているけど生かしていこう、というところに可能性がもっと強く日本中に出てくるといいなと思っているところです。

質問は 1 点ですけど、プロセスの中でいい段階の踏み方をご紹介いただければと思います。

神谷由紀子

オリジナルかどうかという話ですけど、要するにその当時、こういう運動とか活動は時代を背景として出てくるので、当時の日本はやはり経済に寄っていたと思います。経済でないとみんなを説得できなかった。だから自然という観点で物を申しても受け入れてもらえない時代だったので、経済的に分かるようにしなければいけないというのがひとつは苦心どころだった。当時は当然のように持続可能だとか地方の自立だとかそういう言葉がありましたので、やはりそれらが知らず知らずに反映されて 90 年代後半に起きた日本のフットパスの特徴付けになったんだと思います。イギリスの場合は同じような過程ですけども、いろんな条件も違いますし、だからこそあちらは法令化というか法令にしないと遵守されないというところがあった。日本はそういう状況ではないので違っていましたが、時代の要請があり、私たちとイギリスのフットパス活動の方々が付き合っていく内に、「あ、これは経済的なことを入れた方がいいかも」という感じのムーブメントはあったと思うんです。それで、だんだん日本での動きが盛んになっていくから、やはり経済的な効果により人を何かさせるんだみたいなのはあったと思います。さきほどおっしゃったように、経済的なことだけではなくて、私が見ていて一番感動したのは、村の人たちがちょっとしたお金をもらったり、ちょっとした活動に参加したりすることによって、誇りを持ったりしていることによって

目がキラキラしてきて、自分たちの村を自分たちでなんとかしていこうという気運がお母さんからお父さんに移ってきて、「ああ、これが本当の地域活性化っていうんだ、まちづくりっていうんだ」って、私はそのとき勉強させてもらった。上から箱物をもらったり、お金をもらったり、そういうのではないんだなと思いました。だから、なるべく積極的に参加してもらうために例えば、トイレがないところでは、農家の外付けのトイレを貸してもらったり、それからちょっとしたものを出して、漬け物となんかとかと、とにかく絡めて一緒になにかをやるようにして、要するに喜びを分けていくようにしました。その結果、みんなの意識が上がってきてさっきのように里山交流館を作ろうとか、みんなの共通の利益になるような形になってきました。

徳永哲

もうひとつだけ、まちづくりにスタートから今に至るまで大体、どれくらいの時間がかかっているのですか。

神谷由紀子

25 年くらい前から始めていて、その頃は車でいつもここを走っているけれど歩いたことないよね、という地域を歩くのが珍しい時代だった。あなたたちが来るから、空きカンが落ちていたり大根が抜かれたりするんだという誤解を解くところから初めて、今そんなことを言う人はいないと思いますし、フットパスによるまちづくりがこれだけ進んでおり、地域を見ることが当たり前になっていますけれども、その当時はそうではなくそんな時代から活動をしていました。

廣川祐司

北九州市立大学の廣川祐司と申します。私は北九州のほうで学生と一緒にフットパスづくりをしている関係で神谷さんとか、このあと報告される小川さんからいろいろ教えていただきながら、取り組んでいる者です。専門は法社会学といって法学なのですが、フットパスにはまった理由がそもそも、地域住民との交流がこれまでにない観光の形として、非常に魅力的であると感じたためです。専門の先生がいるなかで恐縮なんですが、「文化的景観」という言葉がありまして、フットパスって、地域の生活を感じる、培ってきた生活の中で形成された風景を楽しむことができるのが醍醐味なのです。ただのきれいな景色とかではなくて生活を感じることができるというのがひとつの特徴で、どちらかというと地域側に観光の主体性があるわけです。地域側がどちらかというと観光のメイン、というのが非常に面白かったのです。あとは、観光学を専門とされている先生方が多くおられるので、「それは観光じゃない」と言われるかもしれないですけど、いわゆる観光ってホストとゲストという関係性がある中で成立すると思うのですが、フットパスをやっている中でこの主客が一体化していくというような現象を非常に感じました。地域を消費しているという感じではな

くて、「歩き手も一緒にフットパスの作り手になっているな」という感じを非常に多くの場面で見受けられました。神谷さんの報告でいうと、日本のフットパスの特徴というのは、歩き手はリピーターが非常に多いんですよね。町田の場合は、約 80%というのを聞いていましたけれども、リピーターになってその地域が好きになって、地域の人と仲良くなって、それで口コミで広がっていくという形で普及しています。リピーターになる中で、今度、地域のお祭りがあるから参加しないか、とか。地域の行事とか地域の婦人会の集まりとか、そういったところに、歩き手の観光客が参加していくという現象が生じる。これは新しい観光の形なんじゃないかと思っているところです。単発的な出会いでお金を消費して終わっていく観光ではなくて、そこの観光で出会った関係性を築いて、まちづくりとか持続的に関係性をつなげていくということが起こっており、この効果こそフットパスでは非常に重要であるということを感じました。

それが神谷さんから教えてもらったことのひとつです。何故、法学の私がフットパスをやっているかというと、さっき、神谷さんから赤道とか里道という話をしたと思うんですけども、これは法律用語です。里道(さとみち)と書いて「りどう」と読む、道路法に記載のない慣習用の道で今は各市町村の財産（管理道路）になっているんですけども、いくら市町村の行政財産になっているからといっても、集落で管理しているような道ってなかなか観光客が入りづらいのが現状です。しかし、それをここは「行政財産だからいいだろう」と言って、ずかずか入っていったらそれはそれで問題になる。そんな中で、市町村の行政財産だけど、入るのに地域の許可がいるとか、地域の人の理解、許可を得ながら作っていくということに、まちづくり、地域づくりの接点が多い制度だなと思うようになりました。そういう地域の日常の中にフットパスを埋め込むという視点が非常に強い活動をされておりまして、これこそ、観光というキーワードをつないで地域活性化ができるのではないかという切り口で、いろいろとフットパスづくりの実務家の皆さんたちと連携しながら、学生とフットパスづくりをしている最中です。

最後に質問です。実際に神谷さん自身が歩き手という側面と作り手という側面となおかつ、フットパスづくりをしている地域のアドバイザーという視点があって、今、フットパスが非常に盛り上がって全国各地に広がっているんですけど、中には質の悪いフットパスコースもありますよね。いわゆる、地域の人たちが歩くのがブームだからといって、実際には歩いて道選びをするのではなく、公民館の中で地図を広げて、道をつないでいくというようなコースを「フットパス」と呼んでいるものも中にはあって、歩いてぜんぜん面白くないんですね。そうなってきたときに、フットパスの質は今後どうやって担保していくのかというのも非常に重要になってきていて、僕の関心もあるんですけども、どうやって「質の担保をしていくのが望ましい」とお考えでしょうか。神谷さんはお互いフットパスを手がけている人同士でネットワークをつないで、お互いに歩きに行く、それが定期的なチェック機能を果たすとか、作り手やアドバイザーだけじゃなく、自分も歩く、歩き手が作るというのも重要というご お考えを断片的にはいろいろ立ち話的に歩きながら聞くこともあったんですけど

も、今後は日本のフットパスの質を担保していくためには、何が今足りないのか、制度的にもっとこうしたらいいのではないか、というお考えがあれば教えてください。

神谷由紀子

まず、実を言うとフットパスの立役者の地域のひとつは美里とか北九州とか九州勢がすごく今、頑張ってくださっていて、沖縄のフットパスなんか、いろんなところを全部やっていただいて、本当に今大きな勢力になっています。廣川先生とか内田先生なんかが中心でやっておられますけど、私も非常に学ぶところが多いですし、学生さんたちを有効に生かして、若い人たちを有効に生かして、地域作りをおこなっておられます。認定というのがいいかどうかについて、私は上からの認定というものはあまり好きではなく、やりたくないんです。ただ、質を保つためにどこかが悪いと「あぁ、フットパスってこんなもんね」っていうと終わりにされてしまうのが一番恐いんです。北海道の JR などの例もたぶんあると思うんですけど。もう私たちはやっぱりフットパス協会としてはこの程度にしてもらいたいというその意味での認定というのはやっぱりあるかなと思うんですけど、なるべくならそういうことをしないで、なるべく会に入っていただいて、切磋琢磨していくしかないと思います。そのうち、自転車とかトレイル・ランとかイギリスみたいに道の使い分けをしなければならなくなる例もあるので、そういう使い分けなんかも考えていかざるを得ないかなと思います。あまりお答えになっていないかもしれません。私も分かりません、教えてください。

フットパスとは

「イギリスを発祥とする“森林や田園地帯、
古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景
を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる
小径（こみち）【Path】」ことであり、ひいては
このみちを歩くことの総称である-
-「日本フットパス協会」

フットパス＝ありのままを楽しんで歩く

健康ウォーク、観光、トレイル　などとは少し違った歩き方

深い感動のある歩き（vs　観光）
目的やテーマを定めない歩き（vs　歴史、自然ウォーク）
どんな人でも歩ける歩き（vs　トレイル）
発見のできる歩き（vs　散歩）

多くの人を惹きつけ地域の活性化まで促す
魔力のある歩き

フットパスの魔力

観光地でなくとも
歩いていいなー、またきたいなーと思える歩くみちを作るだけで

→①そのまちのオンリーワンの魅力が自然に浮き彫りになる
だから、どんなまちにもそこにしかない自慢できる“観光”が生まれる

→②ファンやリピーターを作る。
観光のように“点”ではなく、みちの“線”、環境全体の“面”、
原風景の“心”で、魅了する

→③楽しい―楽しさが伝染する、
理屈なしに、楽しいので、歩く側ももてなす側も相互に楽しい
地域も巻き込むことができる、
簡単で失敗がないので、各地で採用され、連携が進んだ

その結果

→④自発的なまちづくりの気運

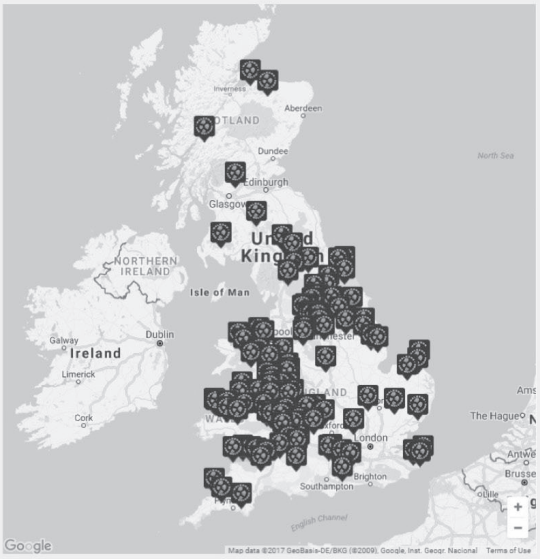
フットパスまつり---石阪町田市長の挨拶

まちづくりへのフットパスの効果

まちづくりの全要素

①まちづくり資源の発見
②ファンづくり
③共同体の再生
④プラットフォームの形成
⑤経済効果—地元の第一次産業にも効果

Walkers Are Welcome
112自治体



ウィンチコムの経済効果の例

A. 3日間のウォーキングフェスティバル：イベントと25コースのウォーキング

- 4,000ポンド（61万円）：ウォーキングとイベントの参加費
- £4,200ポンド（64万円）：フェスティバル期間のウィンチコム滞在費---ベッド、朝食、夕食（60 x£70 1泊1人あたり）
- £1,000ポンド（15万円）：毎日100人以上の昼食代、駐車場およびその他の買い物
- 合計9,200ポンド（140万円）

B. 一年を通してウォーカーの落とす金：（ウォーカーによる増加分）

- £2,000ポンド（31万円）：駐車料金（1週間に50ポンド、1日に40台の車）
- 毎週£10,000ポンド（153万円）：昼食分（20人/ランチ×50週間週@ 1人£10）
- £35,000ポンド（5343万円）：1年間の滞在費：ベッド、朝食、夕食（10人£70×50週）
- £5,000ポンド（76万円）：ガソリン、タクシー、バス運賃
- £10,000（153万円）：ローカルショップでの一般的な買い物
- 合計**£62,000 （946万円）**

C. A+B＝ Total £71,200 （1087万円） Grand Total per year

D. WaWの町として8年以上活動しているので、少なくとも569,600ポンド（8683万円）が落とされていると考えられる。

さらに最近、walking holidays の旅行会社がウィンチコムをベースキャンプにしてきている。滞在費として「ベッド、朝食、夕食」を計算しているが、これは他の収入ももたらし、旅行会社から地元のガイド費として、1日に120ポンド（1.8万円）から200ポンド（3万円）を支払ってもっているし、参加者からチップをもらうこともある。また、地元のタクシー会社やその他のサービスも利用されている。

地域おこし協力隊